

ぽいぽい

挿絵／みやねあき

魔  
を  
祓  
う  
神  
巫

宮道京香の

寝取られ退魔帖



試し読み版

18  
未 満

二次元ドリームノベルズ

## 登場人物紹介

Characters



### く どうきょう か 宮道京香

負けん気の強い女子校生で人知れず家業の退魔師をしている。古めかしい掟である『初夜』を控えるなか、幼なじみの遼佑に中々素直になれずにいる。





はぎ ま き み ひ こ

## 狭間君彦

京香のよき理解者である叔父で整体院を営んでいる。今は亡き京香の母に恋心を抱いていたというが……。

# NTR EXORCISM NOTEBOOK

み か どり よ う す け

## 御門遼佑

細かいところは気にしない竹を割ったような性格の好青年。正義感にも溢れている。京香とはよく喧嘩になるが戦闘では息ぴったり。

第一話	穢された退魔巫女
第二話	悦虐の輪姦調教
第三話	堕ちゆく想い
第四話	魔に捧ぐ純潔
第五話	寝取られた幼馴染み
最終話	約束

尻が垂れる。

迫ってくる君彦の顔を撥ねのけることもできず、されるがままに再度の口付けを許してしまう。

「ちゅ、んむ……くちゅ……ぢゅ、むうう……っ」

もみもみと無造作に乳餅を扱かれながらのキスに、頭の中がふわふわとピンク色に蕩けていく。好きでもない男に淫らなことをされて、京香の身体は異常なまでの快感を覚えてしまっていた。

「今度は変な真似するんじゃないよ。もしもまた噛みついたりするようなことがあれば、遼佑君が悲しむことになるかもしれない」

快楽の水面に沈みかけていた意識がハッと浮き上がってくる。ほんの数刻前、心に想う異性と交わした口付けを踏みにじられ、上書きされている事実、胸の奥がズキンと痛んだ。

（ち、違うんだ遼佑……これは、変な葉のせい……!）

罪悪感のおかげで思考が冷静さを取り戻したのも束の間。快感に抗ってキスから顔を背けようとすると、君彦の指先がぷつくりと膨れ上がったいやらしい乳頭を抓りあげた。

「くううんんんっ……♥」

拘束された指先までも一息に桃色の快楽電流がひた走り、子犬のような可愛らしい声が迸る。そのまま乳首をコリコリと嬲られながら何度も何度も啄むように唇を奪われ、再び京香の頭の中はぐちゃぐちゃに蕩けた。

「ちゅ、るりゅ……んっんっ……んっんっ……むちゅうっ……♡」

（うあ、あああ……ごめん、ごめん遼佑え……これ、だめなのお……乳首、抓られながら……チューされるの、頭変になる……んんっ……!）

『げひゃひゃひゃっ、随分大人しくなったじゃねえか。こりゃ本性はとんだ好きものだな』  
普段の凛々しく吊り上がった双眸は今やとろんつと垂れ下がり、されるがままに唇を塞がれては、ふうふうとはしたくない鼻息を零す。

蛇鬼の耳障りな嘲笑も届かないほどに、妖魔の淫香と君彦の淫猥なマッサージコンボは京香の頭をダメにしてしまっていた。

「うう、あ……え、あ……っ?」

いつの間にか京香のしなやかな脚部は太股に開かされていた。肉付きのいい太腿を通してスカートが脱がされ、ブラと同じささやかなリボンが刺繍された水色のショーツが丸見えになっている。施術台の下に回った君彦がその見目麗しい太腿を揉みしだきながら、静かに笑っていた。

「おやおや、まさかここまでとはね。京ちゃんがこれほどエッチな娘だと遼佑君が知ったらどう思うだろうねえ」

叔父と妖魔の前に曝け出された京香の恥部——淡いアクアグリーンのショーツの真ん中に、じんわりと船底形の染みが滲んでいた。いまだに口吻の快感で頭が働いていない京香にはそれがなんの証かすぐにはわからない。

「あ、うああ……うそ……これ、そんなの……っ」

ねっとりとした染み——快楽によって分泌された雌の粘汁。理解した瞬間、うなじがぢりぢりと燃えるような恥ずかしさに襲われた。おなかの奥がむずむずとわななき、ショーツの中央にきゅうつと縦筋の割れ目が浮かび上がる。

「う、うそだ……ちがう、違う違う……っ！ 違うんだ、遼佑ええ……っ」

こんな姿を遼佑が知ったら、軽蔑されてしまうに決まってる。こんな、こんな最低の姿、

「や、ああ……んくっ、ふああ……っ」

ぞくんぞくん——！

ヒクつく肉唇からじゅわあつと淫らな染みが湧き出し、留まることなく広がっていく。

『おいおい、まさか別の男のこと妄想して濡らしてんのか？ このド淫乱が！』

「ち、ちがう……ちがううっ」

羞恥に真っ赤に燃え上がる顔で京香は叫ぶ。妖魔の言う通りだった。遼佑にこんな痴態を見られたらと想像するだけで頭が沸騰しそうになる。

「なにが違うんだい？ 施術台の上におもらしたみたいに滲ませておきながら」

「ちがうっ……私は……淫乱なんかじゃ——！」

「いや、君はとびきり淫乱な女の子さ。大丈夫、遼佑君のことは僕が忘れさせてあげるよ。だから安心して妖魔の仔を孕んでくれ」

告げられた言葉がわからず、京香は絶句して彼を見上げる。

「舞香と僕とを引き離れた鷹野の退魔族に復讐するために、君にはたくさんがんばってもらわないといけないからね。それじゃ始めようか」

ただでさえ混乱する京香の目の前に、さらなる困惑が突き出されたのはその直後。

「な……あ……っ」

ただただ目を見開いてそれを見る。露出した君彦の下半身に、まるで塔のように聳え立つ肉の剛直。初めて目にする生の男性器を呆然と見つめる。

「さすがに生の男のチンポを見るのは初めてかな？」

柔らかな裏腿が持ち上げられる。股間をM字に開脚した乙女にあるまじき格好で固定され、

「な、あ……熱、いい……っ」

クチュツ、にゅつ、ちゅくちゅくう……！

濡れた股座に肉鏝が押し付けられ、感じるままにそんな言葉が口走った。ジクジクとした淫肉熱が、布一枚隔てた向こうの厚ぼったい秘唇を炙っていた。

『淫乱じゃないだあ？　ぷっくり充血してるてめえの土手まんこを見てみろよ、げひゃひゃ！　パンツの上からでもはつきりわかるぜ。早く孕ませてえってくばくばおねだりしてるじゃねえか』

ぬちゅ、ずりゅ、と恐怖心を煽るように滑らかな股座の上をガチガチの肉棒が往復する。全身を媚香漬けにされている京香には、それだけで気が狂いそうな快感。普通の女ならとつくに腰をへこへこ振りたいくってチンポに媚びていてもおかしくない。

「誰が、妖魔の仔なんて……孕むものか……っ」

それでも京香は媚薬に蕩ける頭を叱咤して目の前の陵辱者たちを睨みつける。



(そもそも、初夜を迎えるまでそんなことはできないんだから……!)

初夜——その儀式はなにも戒律的な意味で存在するわけではない。神力を持つて生まれた女子はそのときより秘部に封印を施され、初夜までの十数年、巫女の純潔を守る。

れっきとした強制力のある掟なのだ。だが、そんな京香の考えを嘲笑うかのように君彦は優しく微笑む。

「まさか封印のことを元退魔師の僕が忘れているとも思ったかい？」

「え……う、あ……ああつ……!!」

ぬ、ちゅ……くぱあッ……♥

ショーツの内で秘所が割り開かれ、恥ずかしい愛液の跡に沿って君彦の指先が押し込まれた。

ぐにゅっ、にちゅううっ……!!

「ひあつ、ああつ、ふやあああああつ——!!」

愛液塗れの布切れを押し込むその指先が、まるで見えない膜に突き当たったように押し留まり、それ以上は侵せないことを確かめるように、京香の秘部が入念にぐちゅぐちゅと掻き回される。

「蛇鬼」「あいよ」

禍々しい妖力を感じて顔を上げると、妖魔が影をなびかせながら宙空に渦を巻いていた。

「今から行うのは、君の身体が妖魔の仔を孕めるようになるための下準備だ」

ぐちゅりと重い水音が響き、君彦はその渦の中からピンポン球ほどの黒い塊を取り出す。

「こいつを初夜までの一カ月、君の身体の中で育ててもらう」

「なあっ——!？」

身体の中？ 育てる？ 呆然とする京香をよそに、突然ショーツがずらされ、むっちり  
と女肉の詰まった桃型の尻房が曝け出される。

（えっ……おし、り……?）

次の瞬間、べとべとの黒粘液をまとったおぞましい球が、京香の臀部でんぶの中心——所在な  
げに息づく小さな窄まりすぼまりにぶちゆりと押し付けられた。

「な、ああ……んぐうああっ——!？」

——ビクビクビクビッ!

粘液を潤滑油に、ぬるんつと肉襞を押し拡げて侵入した刻球は、強烈な異物感を京香の  
直腸に刻み込みながら狭隘な肛道きょうどうを掻き分け挿入はいっていく。

「うぐ、ああ……いやああっ! 変なもの、挿れるなっ! だせっ、だせええ……っ!」

「なかなか抵抗力のある尻穴だ。少し調教が必要なようだね」

続けざまに尻の上に掲げられる醜悪な肉槍——血管を浮き立たせた巨根が、黒粘液に塗  
れた肉菊に「にちゅうっ」と粘い音を立てて押し当てられた。

「まさ、か……そんなもの、うそだ……挿入るはずが——ぐううっ!？」

「ふむ、さすがに一息にとはいかないか」

先の刻球より一回りも大きい灼熱の肉串がぐちゅぐちゅと肛門口の肉びらをめくり返す。  
「い、いやっ……やめ、ろ……くううんっ! そんなの、挿入るわけ、ない……っ」

だというのに、神経の集まる敏感な排泄穴は当然のように媚香によって昂<sup>たかぶ</sup>らされていた。滑らかな亀頭で肉皺の一本一本をねつとりとほじくられるだけで、腰が蕩け墮ちるような刺激が駆け巡る。

にゅぷっ……ぎゅぶつちゅ、ぐつぷうつぢゅっ！

「が、あっ——そんな、な……おしり、挿入ってるうう……あ、あっあっ……んっぐううううっ♡」

ほぐされた肛肉はぬもつぬもおつと硬く太い君彦の雄チンポを抵抗なく受け入れてしまっていた。

（ふ、太いいいっ……おちんちんっ太すぎるっ——だめえ、こんなの、お尻が裂けてしまいうう……っ）

退魔の封印は乙女の純潔こそ守ってくれるものの、後ろの処女まではその効力は及ばない。

「抜い、てえ……んいいッ……あぐうううっ！ 叔父さん、目を覚ましてええ……っ」

生まれて初めての肛門挿入。なのにゾクゾクと京香の背筋をわななさせるのは決して苦痛などが原因ではなかった。

（なんで、お尻の穴、こんな、こんなあっ……♡）

えも言われぬ恍惚<sup>こうこつかん</sup>感。君彦の肉棒が徐々に奥へと詰め込まれていくにつれ、低く唸るように溢れ出る嬌声を押し殺すことができなくなっていく。

ぐぼっぐもっ、もちゅううっ、ぬぼぼおっ……！

「お、おおっ……んむおオッ……!!」

奥へと詰め込まれる肉鏝の代わりに押し出された肛肉が、ぽっかりと掘げられた丸肛門の周りに淫猥な肉土手を形作る。

『げひゃひゃひゃ、まるでたらこ唇のチンポフェラじゃねえか。嬢ちゃんのケツ穴、美味そうにもぐもぐ蠢いてやがるぜえ!』

妖魔の下卑た笑い声が京香の心をぐちゃぐちゃに掻き乱す。お尻の穴なんかで感じるわけない。気持ちよくなるわけない——なのに、

（おおっ、んおおおっ……挿入るうっ……おちんちん挿入ってくるうう……っ！ お尻の奥、みちみち押しつけられながらあっ……、ずぼずぼきてるうううっ……♡）

みちゅっ、ぼぢゅううつと耳を塞ぎたくなるような粘い水音が何度も響き渡った。

直腸襞の一粒一粒をぷちゅぷちゅと絡みつかせ、媚香に狂わされた不浄の穴は至上のアナル快楽を味わってしまっていた。

「おやおや、蓋を開けてみればこつちもとんだ淫らな肉穴だ。媚びるようにチンポに吸い付いてくる。君がこれほどのアナル狂いだっただなんて、遼佑君が知ったらさぞ失望するだろうねえ」

「ち、ちがつ……わらひじゃ、にやいいっ！ なかで、勝手にいい……んああっ……んほおおおっ」

（りよう、すけえ……違う、違うのおお……私、お尻でなんか、感じてないっ、アナル狂いなんかじゃないい……っ♡）

涙を浮かべた瞳を白黒させながらも肛門快楽に抗う京香を、二人の悪魔が休ませるはずもない。

「それじゃあ——こういうのはどうかな？」

「ばちゅんっどちゅっどちゅんっ！」

「はっぐううっ——!!」

突然の激しい抽送にくぐもった嬌声が零れ出た。肛門の奥の奥、餅のように柔らかな腸奥が容赦なく押し潰される。

「あっ、ああっあはああっ♥ 押し込まないでええっ!!」

まるで嵐に吹かれる木の葉のように、京香の理性が吹き飛ばされる。

「突き上げられるのと引き抜かれるの、京ちゃんはどうちが好きな？」

今度は敏感な粘膜襞をカリ首で巻き込みながら、出口へ向かって引きずり出される。

「おおおっ、わらひのおひりでっ、遊ぶにやあああっ! いやっやああっやへええっ!」

（だめっ、これだめええっ! ずりずりいいいっ♥ 引きずられりゅ、お尻の穴っ……全部出ひゃううっ……♥）

必死にふん縛っていた肛門括約筋が、馬鹿になったネジのように弛んでしまう。ふわりと頭が真っ白に染まり、身体中から力が抜けた途端、

「ぶびいっ、ぶぼぼおおっ——ぶびびびいっ!」

「やっ、あっ、あああっ——んにやああああっ♥」

異物を詰め込まれた肉穴の奥から、あまりにも下品な音が噴き零れた。

「ははは、今の京ちゃんにびったりなひどい音だ。そうだ、一つこの様子を録画して遼佑君に見せてあげるといふのはどうだい？ 彼もきつと見たいだろう。好きな女の子がどんな風にアナル処女を奪われたかをね」

恥ずかしさのあまり気絶しそうだった。すっかり弛んでしまった肛穴から下品な音が止まらない。

「ぐずぐずに蕩けた君の腸内をチンポがほじくつてる音。わかるだろう？」

「ああっぐうううっ——おほおおおっ♡」

もちゅもちゅと腸肉を貪られながら優しく頬を撫でられ、はしたなく涎を垂らしていた唇までも塞がれてしまえば、もう京香に抗う術はない。

（あ、うああっ……同時は、アナルじゅぼじゅぼされながら、チューは、だめえっ……あふああっ……くううんっ♡）

肛門と唇を同時に塞がれ、まるで身体の手をすべてを君彦に明け渡してしまったかのような錯覚に囚われる。

「んふうっ、ぢゅるっぢゅううっ！ もちゅっぢゅるる——ふへああっ、やめ、息、できにやっ♡」

ズボズボと肛肉を抉られ、ただでさえ息ができないほどのアナル快楽を味わわされているのに、その上唇まで塞がれてしまつては窒息してもおかしくない。それなのに——、

「はぷっぢゅぷっ、れりゅれりゅ……んはああっ……へはああっ……ズぢゅるるるっ♡  
っふあああっ！ キスしゅご、ひいひい……これだめえ、おかひくなっひやうう……っ♡」

抗えるわけがなかった。身体が女に目覚めるこの年になるまで、ろくに快楽というものを知らなかった少女にはあまりにも深すぎる麻薬だった。

「いいぞ、舌を出してもっと絡ませるんだ。もっと悦くしてやるからね。これからは接吻されるだけでケツマンコが疼くようにしてあげるよ」

糊のように密着した一對の口唇の中で、舌粘膜同士がもちゅもちゅと激しく絡み合う。

気づけば京香の嫋やかな両腕は君彦の背中にしっかりと回され、くびれた細腰は抽送に合わせて淫らにくねり始めていた。まるで愛し合う恋人の営みのように――。

『あああ……いいぜえ……神力に反応して刻球がギンギンに滾ってやがる。この調子ならひと月と言わずうざってえ封印も攻略だ』

不意に聞こえた妖魔の言葉。だがふやけた頭でその意味が判然とするはずもなかった。アナルセックスに踊る二人の腰突きは、徐々に激しく深く絶頂への階段を駆け上っていく。

「あつあつ、あつあつ♥ 叔父ひや、激しひつ、ひきやつあああんんつ!!」

どちゅんつ、ぼちゅんつと体重を乗せた凶悪な雄チンポが腸奥を穿つたびに頭の中で快感が弾ける。退魔師としての誇りはおろか、女として、人としての矜持さえも丸ごと刮け取られてしまうかのような劇悦に、ふにやりと表情が蕩ける。

「おおつによおおつ♥ 待つ、待つへえっ深しゆぎひつ――あ、ぐううつ!! なにこりええつ!! いちばん、おくうつ、刻球に、当たってへええっ」

ごりゅんつごりゅんつと。淫らに蕩けた肉壺の最奥に、妖力が溢れるなにかが嵌め込まれる。

（こわ、い……こわいい……たすけ、て……りよう、すけえ……っ）

真っ白に埋め尽くされていく頭の中、最後に浮かび上がったのは恋い焦がれる男の子。だがそれも全体重を乗せた肛奥の一撃によって儚く消し飛ばされた。

「さあイケっ 京香！ 初アナルセックスで覚えろっ！ 今日から君の身体が僕のものだという証を、絶頂をつ、その身に刻めっ！」

息を弾ませ、血走った双眸で見下ろす男が、最後の一撃と共に少女の直腸の中で雄叫びを上げる。

「びくびくつてえええっ!! にやにか来りゅ、どくどく来へりゅっ……んにやあああっ♥」  
どぶっどぶっ——びゆるっ、びゅくるるるっ！

腸内でのたうち回る獣欲の化身。そのとば口から灼熱の奔流がドクドクと解き放たれ、京香の幼い腸内を白濁に染め抜いていった。

「ひやつぐううっ!? おおおっ灼けりゅっ、おなか灼けりゅううっ」

四肢がピンつと張り詰め、施術台の上で疊惑こわくてき的な肢体がボタンボタンッとはね回る。

（お、おほおっ……負ける、ものかあ……あふああっ……!! こんな、なんともおお……ない……っ♥）

腸内に染み込む特濃精汁に意識さえも灼き尽くされ、ついに気高き退魔少女の視界はぶつりと暗幕に閉ざされた。

『ぎやははっ！ 初めてのケツ穴アクメで絶頂失神ときたもんだ。天才退魔師が聞いて呆れるぜ』





い手つきで男の亀頭をシコシコと扱き始めた。

「わかってきたじゃねーか、くうっ……キョーカちゃんのすべすべおてて最高だぜえ……!! 我慢汁しつかり馴染ませろよお……おおっ」

(こ、こんなに膨れて……はあ、はあ……青白い血管が、ぴくぴく動いている……っ) にゅぷ、にゅぷ……にゅこにゅこっ!

「おおおっ……!! もっと強く握りしめろ! そうだ、そのままもっと速く……ぐっ—— おおおっ!」

びゅくっ、ビュッ……びゅるっびゅるるっ!

「うあっ——!?!」

男の命令に従うままきつく指を締めて上下に激しくグラインドさせた刹那、京香の小さな手の中で文字通り爆発したペニスが大量の精汁を噴き上げた。

「おいおい、たかが手コキで早漏すぎんだろ」

背後から見物していた他の男たちが興奮気味に下卑た笑い声を上げる。

「で、でもよ……これが朝のあの生意気な女かと思うと……!! う、おおお……っ」

よほど京香の手コキに興奮したのか、男はびゅるびゅると止めどなく性欲を吐き出し続ける。欲望に正直な男の雄叫びを聞いているだけで、扱き続ける京香の手にも次第に熱が籠もる。

「はああっ……はああっ……んあぁ……!!」

たばたばと頬に降りかかるザーメンの熱さを感じながら、お尻に埋め込まれた肉棒をぎ



ゆっぎゅつと締めつけてしまっていた。

「まあたしかに朝の勇ましさは見る影もねーなあおい」

「あぐうつ……!!」

綺麗な黒髪のポニーテールを乱暴に引つ張られ、にやにやと見下ろしてくる村瀬の視線にさえも、京香はゾクゾクと蠱惑的な痺れを感じていた。

「随分〴〵神威〴〵の効果が効いているようじゃないか」

どうしようもない快楽に溺れかける京香の耳元で、ひそひそと君彦が囁く。

「君にかけた疑似〴〵神威〴〵の効果は肉体感覚の共有だけじゃない。彼らの興奮が直に伝わってくるだろう？ ふふふ、少なくとも遼佑君とじゃ、こんな快感は味わえないはずだ」

遼佑という言葉が一瞬チクリと胸を刺したが、それも一瞬だった。

「んくふああつあつ——!!」

身体の奥まで突き刺されていた肉鉾がズヌルルツつと一気に引き抜かれる。ひたすら挿入されるだけだった尻穴は、突然正反対の快楽を食らってビクビクとはね飛んだ。

（ふうあああつ……なにこれえ……すごくおお……♡）

「おっと、少しイッてしまったかな？ なるべく快感を溜め込むように刺激していたんだが。さて、それじゃあ後は彼に遊んでもらうとしようか」

「だそうだキョーカ。よろしく頼むぜ……!!」

目をパチパチと瞬かせてアナル快感に恍惚こうこつとする京香の身体が、待ちきれないといった村瀬の巨体の中に引き渡される。

「マンコ以外ならなにしたいっていいんだよなあ？」

「ああ、君の劣情の丈を思いきりぶつけるといい」

「てめえみたいな生意気女、ほんととは中出しで孕ませてやりてえところだがまあいいぜ……  
…アナルファックは別に嫌いじゃねえしなあ」

体操用のマットの上に押し倒され、ゴツゴツとした荒っぽい雄の身体に呑み込まれる京香。これみよがしにグズグズにトロけた肛肉を捏ねくり回され、ツポツポと小刻みに出し挿れされる指がたまらなく切なさを煽る。

（うああああ……こんなやつに抱かれて……なのに、ドキドキしてる……？ 私の身体、おかしくなってしまうている……！）

「んぐ、ぐううっ……!? だめえ……お尻、いじるなあっ……この、変態いいっ……んううううっ……っ♡」

「ハッ、授業中にコスプレ青姦してるド変態に言われたくねえぜ。もう我慢できねえって顔してるぜ？ 尻穴こんなに吸い付けやがってよ……そんなに挿れてほしいんなら自分で跨<sup>また</sup>がれや」

仰向けになった村瀬の腹の上に無理やり持ち上げられ、進む熱い肉棒と会陰部<sup>えいんぶ</sup>とが睦み<sup>むつ</sup>合う。

（こいつ……私がもう、限界なの知ってて……!）

興奮にぎらついた雄の視線に見上げられ、ゾクゾクとした悪寒が背筋を走り抜けた。

「だ、誰がお前の……なんかああ……あ、んんっ」

ぬりゅつぬりゅつと、気づけば勝手に腰が動いていた。ひっきりなしに溢れる愛液を村瀬のペニスになすりつけ、早く奥に突き刺してくれと身体が悲鳴を上げる。

「オラッオラッ！ どうした、やらしい動きが抑えられてねえぞ、このド淫乱」

「あつあがつ、だめつ、突き上げる、なああつ！ そんなに、されたらああつ！」

「ほんとは朝も俺たちにこうされたかったんだろ？ 人助けとかぬかしといてよお、頭の中ではレイプ願望でいっぱいだったってわけだ」

「ち、ちがうっ——！ くふうううっ……そんな、ことっ……私は、ただっ……うあつ、あああつ!! だめ、だめだめええっ挿入つてええっ……っ！」

にゅぷつ、ぶぷつ、グぼぼぽっ！

淫猥な気泡を響かせながら、村瀬のペニスが汗と愛液に塗れた京香のアナルに滑り込んでいく。

そうなればもう、たまらない。京香を犯したいという村瀬の欲望が、アナルに埋まる肉棒の固さが、だめで、気持ちよすぎて、理性のタガがバチバチと弾け飛ぶ。

「らめへえっ……おちんちんはいつひやああつ……あ、ああつ、うあああつ——おほおあああつ!!」

「俺のチンポの形馴染ませて、二度と忘れなくさせてやるからなあ、このエロ穴がああつ……!!」

ズブ、ズブぶうううつと肉のほじける音が体内でこだまする。屈服の音が、頭の中で響き渡る。もうだめ、無理、耐えられない——！

「おらいけよつ、イッちまえ！　もう限界なんだろう？　俺様の股の上でヘコヘコケツ穴振ってイキやがれ雌豚！」

バチュンツバチュンツ——バツチュウウンツ！

「あつはあああつ……っ！　きたつ、奥つきたああつ、ズボズボツきたあああつ！　だめえええつ——おおっんおおオオオオツ♥」

ビクッビクッ、ビクンビクンツ——！

肛奥を村瀬の剛直に突き上げられた瞬間、体育倉庫の中に京香の咆哮が響き渡った。破裂寸前まで溜め込まれていた快感がついに爆発し、身体中が馬鹿みたいに痙攣する。

（うああつ……こんなやつに、悔しい、悔しいのにいいいっ……気持ちいいっ……気持ち、よすぎるううっ……っ）

「へへへ、心ここにあらずって感じだな。涎までダラダラ垂らしちまってよお」

己の肉棒でビクビクと絶頂する女体を見て興奮しない雄などいない。それが京香のような男に媚びない類稀な美少女なら尚更だった。

振り乱れるポニーテールを引き寄せた村瀬は、強引に京香の唇へとむしゃぶりつく。

「んうううっ!!　むふううっ、ジュルツ……やめ、りよっ……へふああつ……ま、待つ——レリュツジュズルルツ、ぶはああつ♥　きひゅ、しながらっだめえつ、それだめなんらああ……っ♥」

「ばーか、俺はまだイッてねえんだよ。一人だけ気持ちよくなってるんじゃないねえ」  
湧け合わんばかりに密着した煙草臭い唇が、ところ構わず京香のそれを舐め回す。

ジュボツジュボツ、バチュツバチュバチュッ！

「んむうううっ!? ふひやひいっ……! あ、んあああつ……ころひゅっ、ころひゅううっ! れちゅっんむうっ、ぶああつジュズズウウッ……!」

「ぎやははは、相変わらず口だけは達者だな。いずれその頑固な心も俺のモノにしてやるからなあ」

（ああ、あああつ……頭ぼうつとして……こんなやつに、なのに気持ちよすぎて、もう、もう……っ）

「はあつ、はあつ……ジュルジュルッ……んハアッ……レロ、レロオッ……♥」

「だんだん乗ってきたみてえだな。ほんとてめえは淫乱すぎだぜキョーカ。朝お前を助けたあの間抜けな遼佑君にも見せつけてやりてえもんだ」

「りよ、ひゅけを……悪く、言うなあつ……!」

「やめとけやめとけ、お前みたいなクソビッチな女は俺くらいじゃねえと務まらねえよ。あいつはこんな風に、キョーカちゃんの大好きな尻穴ズボズボほじってくれるか?」

「あああああつ——! ひやああつはげしひっ、ズボズボ、壊れひゃうっおひりこわれりゅううっ——♥」

気持ちいい、アナル気持ちよすぎておかしくなる……。身体中の穴から雌のフェロモンが噴き出す。もう気持ちいいこと以外にも考えられない。

「こっからはお前が腰振って搾り出せ。どうやったら気持ちよくなるか、もうわかんたろ?」

「あああ……止めちゃ……ンンッ……ふあ……！」

村瀬の突き上げが止まると、もぞもぞと悶えていた京香の身体はやがて勝手に動き出した。

疑似神威によって共有された快感を頼りに、的確に男のチンポの弱いところを探り当て、括約筋をうねらせて抜き上げていく。

「ンハッ、んんっ、ああっ!? い、ううう……いつひゃっ、また、ンンンッ！」

パチュツ、パチュツ、パチュンッ——！

何度も何度も絶頂を覚えるうちに、控えめだった少女の動きが次第に大胆で激しいグラインドへと変わっていく。

「ククク、まったく最高の眺めだぜ」

見上げた先で二つの乳果がぶるんぶるんと激しく舞っている。一人の男の股の上で、柔らかな尻たぶをバチンバチンと叩きつけながら天才退魔少女は前後左右に尻を振りたくつていた。

（ああ、ああああ……しゅごいっつ、うんち穴で、おちんちん抜くのすごいよおお……気持ちいい……っ）

「来たぜええっ——オラアッ尻穴締めろ、一滴もザーメン零すんじゃねえぞおっ……！」

「はあ、はあっ……熱っいい……なかで、どんどん、硬くなつてへえ……っ」

ジュポッジュポボッ——ジュボッ、ブボボッ！

「おおおおおっ！ 射精す、射精すぞオラアッ——！」



「はひやああああッああアアッ!」

びゅっびゅるっ、どびゅルルウウッ——ビュボロロロオオッ!

腸奥で弾けた灼熱のマーキング汁が一瞬で京香の肛内を白濁に染め上げていく。

「あふっ……んおっおおほっ……っ」

(あ、ああ……ひゅご、いい……っ♡)

ジョロッ、ジョロロッ……ジョボボボボッ……!

アナルアクメの快感に揺蕩っていた京香の表情がふにやりと崩れた瞬間、弛んだ穴から淡黄の小水が迸った。

男の腹の上を水浸しにし、さらに溢れて白い体操マツトをも黄色に染めていく。

「ぎやははは! 今ここにいるのが遼佑じゃなく俺でよかったな? ケツ穴にザーメン出されて失禁絶頂する女なんて、普通の男ならドン引きだぞ」

「いやあああっ……おひっこ、止まんにやひっ……ひぐっううう……っ♡」

溢れ出すおもらしを止められないまま、京香はピクンッと村瀬の腕の中で絶頂の余韻に浸り尽くす。肛門の奥にドクドク吐き出される男の欲望汁はいまだに量を増しているかにさえ思えた。

身体がどんどん淫らかなものへと作り変えられていく。それが、こんなにも心地よいものなんて——。

(りよう、すけ……たすけてっ……このままじゃ私……だめに、なってしまっ……っ)  
そのときだった。

『——うか……？ 京香……？ 聞こえるか？』

(え……う、うそ……遼佑……？)

まさに思い浮かべた想い人の声が脳裏で反響する。幻聴ではない。お互いの絆を深めた退魔師同士だけに可能な「念話」と呼ばれる連絡手段だ。

『お前今どこにいるんだ？ 保健室にもいねえし……もう昼休み終わっちゃうぞ』  
頭の中で溜息をつく遼佑の声。いつもなら憎まれ口の一つでも返すところだが、  
「どうしたキョーカ、ケツ穴アクメ気持ちよすぎて言葉も出ねえか？」

なにも知らない村瀬がいやらしい笑みを浮かべてゆさゆさと腰を揺らす。

(だ、だめ……今はあ……っ!? あ、うあああ……っ！)

吐き出されたばかりのザーメンが、アナルの奥でぐちゅぐちゅと掻き混ぜられる。村瀬の腹の上でいいように転がされているこんな状況で思考がまとまるはずもなかった。

『ご、ごめん……遼佑……っ！ まだちよっと、調子悪くって……んんっ！』

それだけ返事をするのがやとどった。急にしおらしくなった京香をさらなる快楽に墮とそうと、村瀬がさらに激しく腰を上下に躍らせる。

「へへへ、安心しろよキョーカ。漏らしたくらいじゃ俺は引かねーからよ」

「だま、れ……！！ 終わったんなら早く……！！ その汚いの、抜けええ……っ！」

「馬鹿か？ たった一発で終わるわけねーだろ。こんないい身体そうそうありつけねえかなあ……じっくりゆっくり、俺のザーメンで腹中パンパンになるまでケツハメしてやるから覚悟しろよ」



「じゆる、ずずう……ふはあつ……く、んお……こんな、こんなあ——んふああつ……！」  
あろうことか妖魔に媚を売るようにして舌を絡めている。天才退魔師と謳われたこの自分。

「んふつ、むうう……むふうう……ジュルルッ……♥」

ぞくつぞくつ——ドス黒い背徳的な快感が頭の中を埋め尽くしていた。

ちゅぽんつと唇をめくり返して触手が引き抜かれる。どうやら魔力の源はそこにはないと気づいたようだった。

にちゅ、ぢゅる、にゅろろおつ……！

「あ、ああ……！　そ、そっちは……っ！」

緋袴の裾がめくられ、露わになった純白ショーツの隙間にニユルリと柔らかな肉べらが這う。愕然とする京香を他所に、続けざまに数本の触手が太腿や尻房を捏ね回し始めた。

「ん、くう……あ、ああ……！　おし、り……気持ち、悪い……っ！」

ぬちゃぬちゃと触手に揉まれる尻たぶが瞬く間に媚熱を蓄え、ツウウと珠玉の汗が柔肌を伝い落ちる。気持ち悪いと言いつつも、熱い視線は触手の動きに釘付けになっていた。

当然、妖力を求める触手たちが「そこ」へ行きつくのにさほど時間は要さない。

ちゅぽつ……ツポ、にゅぽぽつ……！

「う、ああ……んひいっ——!?　あ、ああつ、そこはだめええ……っ！」

か細い悲鳴が京香の口から迸る。狭隘な尻の谷間を搔き分け、触手たちが不浄の穴の淵をツンツンと突いていた。



この半月、君彦や村瀬らによって完全な性感帯に開発されたその肉穴は、妖魔たちの弄手によってぷっくり肉厚を増した淫猥なリング状に盛り上がっている。

（身体中敏感になつてゐるのに……今、おしりなんて、弄られたら——ッ！）

にち、にちゅ……くにゅくにゅ……くぽああつ……♥

微細な動きで徐々に肛皺がほぐされ、極小の恥穴がやんわりとくつろげられる。

「離れろ、この……このお……！　んおつ、お、おお……そんな、くすぐるみたい……やめえ……ひやうんっ!?」

必死に手で遮ろうとするが粘液をまとつた触手はうなぎのように手の間をすり抜けてしまふ。

「はうう……おお、お……くひっ……っ！」

敏感な性感部位をぬるぬると丁寧マッサージされ、半開きになつた口からだらしく舌先がのぞいていた。

あまりにはしたなく、ついに遼佑には懇願できなかった尻穴快感——ぷっくり充血していやらしい快楽の蜜を溜め込んだ肉穴を、よりにもよって汚らしい触手妖魔によって弄り回されている。

（なのに……それなのにいい……っ）

「あ、あああ……！　ひ、開く……おしり、開いてしまううっ……！　んおおっううっ……！」

ぞく、ぞくぞくんっ——！

興奮が止まらない。何日も味わうことのなかった尻穴快楽を、本能が覚えていて、勝手に求めてしまう。

「う、あ……ああ……ひ、いい……っ」

（こんなものでおなかの奥、掻き<sup>か</sup>搔<sup>むし</sup>られたら——だ、だめだ……考えちゃだめだ……！）  
粘つく唾液が口の中で弾ける。

そのとき、蕩けた京香の思考を汲み取ったように、ひときわ太い触手が開け広げになった肉穴にむにゆりとその亀頭を押し当てた。

ずぶ、ずぶ……にゆぶっ、ずにゆるるるっ！

「おんっぐううう——っ♥」

有無を言わず、まるでそこが自分の棲<sup>す</sup>み処<sup>か</sup>だと言わんばかりに妖魔が京香の発情しきった肉壺を押し上げる。

（は、挿入ってきてる……こんな、こんなおっきいのおおっ——!!）  
無意識下で期待していたことが現実のものになるうとしていた。

徹底的にほぐされた括約筋はまるで抵抗もせずに異物を受け入れ、ぶよぶよの柔らかな肉感がヒクつく肛道をめくり返しながら、奥へ奥へと容赦なく掘り進んでいく。

「ん、おほおう……ぎち、ぎち……おひりっ、めくれへっ……おおっアアッ……!!」

何日もおあずけにされていたためくるめくケツ穴快楽が全身に沁み渡り、思考が弾け飛ぶ。ピンク色の腸襞を掻き搔られるたびに異物感・不快感をも吹き飛ばす肛悦が、びくっびくっとして美しい肢体を躍らせた。

「ふ——っ……ひう——っ……！ くはぁあっ……んお……んっぐううう……っ！」

（ち、ちがう……っ！ こんなので……こんな雑魚どもでええっ……！）

気持ちよくなってるわけがない。そう自分に言い聞かせようとすればするほど、恥知らずの肉穴はぎゅっぎゅっとなじりるように触手を締めつける。

（変だ……こんなの、変……っ♥ 無理やり犯されてる、のに……頭おかしくなりそうなくらい、気持ちいいっ）

その間にもヌボツヂユボツと太い肉幹が徐々に京香の肉壺に収まっていき、みつちりと不浄の道をいつぱいに占領する——、

「なひ、を——んおおおおおっ!! ぐちやぐちやっ、おひりつかきまぜへええっ!! や、やめっ——暴れりゅ、なぁあっ！ 奥れっ、ジユボジユボオッしゅるなっ……んおっほおおっつつつつ♥」

狭隘な穴の中でビチビチと鮮魚のようにね回る極太触手。ここしばらく無沙汰だったおかげで元の形に閉じかけていた腸奥が一気に開花させられる。

（すごいすごい！ すごすぎるうう……っ！ なにこれ、なにこれえええっ！ 頭のか真っ白になるっ！ だめええ……くる、アレッきてしまいううっ！）

散々に覚えさせられた屈辱のアナルアクメの予兆が、肛門から全身へと駆け巡って馬鹿みたいに身体を震わせる。

「だめええ……それ、だけは……っ！ こんな、ところで……ぶぐっ、ぬううう……ひふうううっ！」

触手なんかで本気ケツアクメに達してしまふ——そんな恥辱だけは避けなければと、残ったわずかな理性で菌を食いしはるが、

（どうして……どうして触手なんかでええ……遼佑とのエッチじゃ、全然だめだったのにいつ……!）

想い人と身体を重ねただけではついぞ達しえなかった絶頂に、こんなにも容易に辿りつきそうだな——それも不浄の排泄穴をほじくられながら。

恐怖とそれを上回る期待感、君彦たちに刻まれた牝の本性とも言うべき被虐欲求は意思に反してむくむく膨れ上がっていく。

（そんなの絶対に認めないいつ……認める、ものかあつ……触手に、イカされるなんてえっ!）

「も、もお……わかった、だろおっ……! なん、にも……そんなとこ、なんにも、にやいいいてえっ……! だから、早く終われええっ……!」

息も絶え絶えになりながら懸命に触手を引きずり出そうとする。だが口腔に侵入してきたとは違つて触手たちはなぜか執拗に京香のアナルを責め立ててくる。

（な、なんでこんなにっ……しつこくう……う、あ……!?! ま、まさか——!）

ジュボッジュボッ——ジュヌルポポオッ!

「おっおっほおおおおおっ!?! ぐるっ、ぐるううううううっ!! お、奥まで……いっばん奥まで、ずっばしいいっ!!」

求めるものはまさにそこにあるのだと言わんばかりに、直腸の先まで妖魔の肉槍が抉り



抜いてきた。

(こ、こいひゆら……まさか、刻球に反応して……!!)

淫らな悦楽を感じるたびに京香の下腹で輝く淫呪——その元凶となっている蛇鬼に埋め込まれた刻球が、同じ闇の生物を惹きつけているのだ。

「こ、壊れひゅ……けひゅあにやっ壊れるううっ！ らめええっ！ こんなやの、死ぬ、死んじやううっ……っ！」

ぷちや、ぷちやああつと股間の純白ショーツに溢れた蜜汁が広がっていく。

(あ、ああ……最低だ……最低、すぎるうう……処女、なのに……触手でケツ穴いっぱいに詰められて……苦しくて、たまらないのにいい……っ)

全身を隙間なく触手に埋め尽くされ、死んでしまいたくなるほどの恥辱を受けているというのに、そんな破滅感さえも京香の心をさらなる被虐快楽で炙り立てる。

(そっか……わらひ、感じてるんだ……こんな触手でも、無理やりされたほうが、どうしようもなく感じてしまうんだ……っ♡)

ずちゅっ、ずちゅんっ、ごちゅんっ！

「おっ、おほっ、んああああアッ——!!」

(奥でっ、ごちゅんってええ……っ！)

大人の腕ほどに一直線に割り拓かれた腸奥で予想外の衝撃が起こった。と同時に——、

「な、なんらっ、なんらこれええっ!？」

パアアアッと下腹の淫紋が熱く瞬いたかと思うと、京香の全身から一気に力が抜け落ち

る。

(ま、まさか、まさかああ……ッッ)

おなかの奥に秘されている淫紋の源——蛇鬼に埋め込まれた刻球が直接ゴツゴツ突かれていた。

この半月の調教で尻奥に蓄えられた妖力を、触手が美味そうに貪っているのだ。

「ぎもぢ、いい……おくう、ジュルジュルつてええ……うあ、ああ……もうだめっ、がまんっ、限界いい……だ、だめダメッ——イク、もう……イク、ケツ穴イク、アナルイクッ、触手で、雑魚妖魔なんかでイッうう……イッくふうウウッッ——♡」

がくつがくつ——ガクガクンッ！

立ったまま触手に搦めとられた退魔少女の身体が、前後左右に卑猥なアクメダンスを披露する。

「あ、あぎひいい……きた、きひやつらああ……キメひやつらああ……気持ち、いひ……ふあ、ああ……ぎもぢいいいッ……ッッ♡」

真っ白になる頭の中に、何日も待ち焦がれたアクメの快樂波が流れ込んでくる。舌を突き出し、だらしなく開いた口元から嘘偽りない言葉が自然と溢れてくる。

(ああ、あ……イッひやらあ……イッへしまっひやああ……こんなやつに、イかひやれてええ……ッ)

自分を貶し、蔑むほど倒錯的な快感がアクメの余韻を引き立たせる。

「りよう、ひゅけえ……ごめん……わらひ、こっちのほうが——雑魚妖魔の触手のほうが、

感じるみたひいいっ……♡」

遼佑を裏切るような言葉に胸が張り裂け、その跡からドロドロとドス黒い快樂の甘蜜が滴る。

もう京香にはこの背徳感に溢れた快樂を拒むことなどできなかった。

ずちゅっ、ぶちゅっぶちゅっ、ぐぼオオッ！

「おおっンおオオッ!? 今イッたばかりいい……また、またイグッ、イグ、イッぐううああっ！ ひゅごひっイイッ！ ぐちやつてええ、あらまのなかも、けちゅあなも、全部ぐちやぐちやああ……っ」

刻球はおろか尻奥に溜まったすべてのものをすり潰す勢いで妖魔は京香に襲いかかる。

すっかり腰砕けになった足を持ち上げられ、林木に手を突いた状態でごちゅんごちゅんと胎の奥から響く殴打音。

心と身体が陵辱者と融け合うような感覚に、京香は覚えがあつた。

「な、なにこれえ……ほんろに……からだ、ぐちやぐちやに蕩けるうう……う、ああ……!!? これ……あいつの、蛇鬼の……神威いい……っ」

わずかによぎった恐怖はすぐに掻き消え、快樂に蕩けた表情がふにやりと妖艶にたわんだ。

（は、はは……わたひ、今……触手と神威しちやつてるんだ……遼佑とだけの、ものだったのに……雑魚妖魔なんかと一緒になっちゃつて……えへ、えへへ……もう全部……ぐちやぐちやああ……♡）

ジヨ、ジヨロロ……ジヨボボボボ……ッ！

快樂に弛緩した心が最後の一線をぶつりと手放すのと同時に、京香のショーツに淡黄の染みが広がっていく。

「ふああっ……!! あ、ひゃああ……でひえる……きもひ、よしゆぎてえ……おひっこ、じよぼじよぼ……漏れひやつてりゅう……っ♥」

もはや失禁をこらえようとせず、じよろじよろと進むままに小水を地面に撒き散らす。そんな京香の痴態に合わせて触手が尻穴の中で動き回り始めた。

にゆる、にゆるんっじゅぼじゅぼっ！

（こ、こいひゅ……喜んでりゅ……わたひが、おひっこ漏らすの、楽しんでりゅ……っ）  
疑似神威によつてシンクロした妖魔の感情までも京香の心に流れ込んでくる。

「えへ、ふへへ……おひっこ、漏らして……けちゅあな、ほじくられてええ……変、態……  
…こんにゃのお……お、おおっ……最低の、変態いい……ひぐっ、んひいい……っ♥」

もう——止まらない。背筋を栗立たせ、最低の行為だと自分をなじりながら、もつと深く暗い快樂の底に沈んでいくのを誰よりも京香自身が望んでしまっていた。

ズリュッ、ズルルッ……ぐぼっぢゅぷっ！

「んおおオオッ——!!」

絶頂に浸る身体の内側で、不意に触手妖魔がもぞもぞと蠢動した。妖魔と一体化している京香も、次に触手がなにをするつもりなのか自然と理解する。

「あ、ぐう……う、ああっ……!! ま、待つへえ……まら、イッてるからあ……ッ！」

ズルッズルッ、ぐぼぼおっ……!!

「お、おほおおっ、でりゅっ、でるりゅう……!!」

妖力をたんまりと吸収して肥え太った極太触手がずるずると尻穴の中を後退する。

触手の亀頭に圧しのべられていた腸襞が、今度は一斉に逆向きに掻き耖られた。

「おおっ、おっほおっおお!! ひ、ぎいい……で、でりゅっでりゅううっ! けひ

ゆあなズルむけになりゅううっ——!!」

びつちりと詰まっていた肉触手が肛道に再び空洞を生み出し、ずる、ずるり、と京香の  
中が空っぽになっていく。

ぶぼっ、ぶびっ、ぶすつぶすううっ!

闇夜の林の中、耳を塞ぎたくなるような音が接合部から響き渡った。

「ひゅごおっひゅごひいっ! おおっンオオッ……い、ぐうッ……♡ こしゅられ  
ながらイク、イクうう……いきながら、でてりゅ……ずるずるっ、ぶっとい触手でりゅ  
ううっ……♡」

それさえも今の京香にはただの快感を増すスパイスでしかない。強制的に排泄させられ  
るような快感に、目を白黒させて悦がり狂う。

(ああ……気持ちいい、死んでしまうくらい、ぎもちいいのおお……っ)

すでに何度も深い絶頂に達し、太腿がびしょびしょになるほど愛液を迸らせている。

それでもまだ足りない。この数日の間に溜め込まれた快楽欲求は、もっともっとと不浄  
な穴での快感を求めていた。

「やああつ……まだ、まだ出ないれええ……っ！ もっと、アナルいっぱい、ぐちゃぐちゃにつ……気持ちよくしてええ……っ」

ぐむ、ぐむむ……ぶじゅっ、ぶぼぼっ！

アナルアクメの虜になった身体は、あろうことか括約筋を必死に絞って触手を留まらせようとしていた。

「ぎひっ、ぎ、いいいっ!? これ、すごっすごひいのおおおおっ ♥ ケツあにやつ閉じたまま、ぶりゅぶりゅ漏れてるううっ……!」

双眸を見開き、快楽を貪るみっともない牝イキ顔——月明かりの下に晒される少女の顔に、天才退魔師と呼ばれた面影は微塵もない。

（えへ、えへへ…… ♥ 今だけ、だから……もうイクの我慢できないから……だから、誰も見てない今だけ……死んじやうくらい、イかせてええっ ♥）

退魔師という使命を放棄し、快楽に塗れるという背徳に脳内がビリビリ震える。

「うあ、ああ……も、もう出口まできひやつてるうう……極太触手のカリ引つかかって、ビクビクしへええ……だ、だめなんからああっ ♥ まら、抜いちゃああ……だめだめええっ…… ♥ もっろ、イかせてええっ！ 馬鹿になりゆくらい、けひゅ穴がばがばになるくらひっ……ジュボジュボしへええっ！」

快悦の叫びと共に、ぴしゅっぶしゅっつとショーツの下から蜜汁が噴き上がる。

ぎゅうううつと窄められた肛門口で、その動きが一瞬ぴたりと止まった。

「あ、ひ……いっ……っ」



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**



ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌!

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌!

正義感に燃える少女達をたっぷり陵辱! ヒロインのピンチ満載!!

【偶数月】  
隔月発売  
2-4-6-8-10-12月

【奇数月】  
隔月発売  
1-3-5-7-9-11月

【電子版】  
毎月配信  
書籍版は奇数月  
発売!



二次元  
**ドリーム  
マガジン**  
2D DREAM MAGAZINE

コミック **O.M.I.C.**  
**UNREAL**  
アバノアール

正義の  
ヒロイン  
**正統の  
監獄  
ファイル**  
Justice Heroine's Prison File

あなたのキモチイイをお手伝い! キルタイムのアダルトコミック誌  
全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中!

電子書籍版も  
好評発売中

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコビル TEL: 03-3555-3431 (販売) FAX: 03-3551-1208

最新情報は公式サイトへ! キルタイムコミュニケーション

検索



日常に密着したエロス

フリーダム120%!?  
ジャンルにとらわれない  
ドキドキ★ラノベ!

優美刑事女

リアルドリーム文庫

あとみつゝ文庫

呪詛喰らい師

あとみつく文庫  
キリタイムコミュニケーション小説シリーズ

あとみつく文庫

呪詛喰らい師

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ?

夢世界デキる妹

いなかみしる

二次元ふち文庫

精靈機上  
ハルキ

あの人気作品の  
外伝作品もあり！  
電子書籍でしか読めないエッチノベル！

姫騎士 クラスメート!

ビギニングレベルズ

「小説家になろう」の男性向けサイ  
「ノクターンノベルズ」  
から書籍化!

異世界で  
デキる妹は  
いかがでしょうか？

ドキドキクラブな  
ハーレム系  
ライトノベル

二次元ドリーム文庫